

# 青年が捉える両親の夫婦関係の認知が 青年のレジリエンスに与える影響

内田早紀奈<sup>1</sup>・石田 弓<sup>1</sup>

The cognition of Parents' Marital Relationships and Adolescents' resilience

Sakina Uchida and Yumi Ishida

A study of whether adolescents' cognition of their parents' marital relationships had an influence on their resilience and self-esteem was conducted, taking gender differences into account. College students answered questionnaires that measured their cognition of the parents' marital relationships and the students' self-esteem and resilience. The results of examining the relationships between these three factors were as follows: 1) Adolescents who were cognizant of their parents' marriage being good had higher self-esteem and resilience than those who were cognizant of it being bad. 2) Similar results were observed for the influence that an adolescents' cognition of the marriage of their mothers with their fathers exerted on the cognition of the parents' marital relationship. 3) No gender differences were found in the influence that the favorableness of an adolescents' cognition on the marriage of their mothers with their fathers exerted on the favorableness of the cognition of the parents' marital relationship. 4) No gender differences were found in the extent to which the adolescents' cognition of the parents' marital relationship influenced their self-esteem.

Key words: adolescents' resilience, self-esteem, College student, Parent-child relationship, the cognition of parents' marital relationships

## 問題

### レジリエンスについて

我々が生活する上で遭遇する様々なストレスやネガティブなライフイベントは、個人の精神的健康に深刻な影響を与えることが、これまで多くの研究において指摘されている。しかし、そのよう

---

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科

なライフイベントを経験しても、すべての者が抑うつやその他の不適応状態に陥るわけではない。一時的には精神的に不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的、社会的に良好な状態を維持し、適応的な生活を送っている者も存在する。このような弾力性のある心の特性に関して、レジリエンス(resilience)という概念が近年注目されている。石毛・無藤(2005)では、レジリエンスの定義として、「ストレスフルな状況でも精神的健康を維持する、あるいは回復へと導く心理特性」と述べている。本研究では、石毛・無藤の定義を用いることとする。

レジリエンスの研究については、様々な領域や対象において、個人の特性や能力のみならず、適応に向けての心理的過程や、不適応状態に陥るような出来事の後にとどの程度適応的な状態まで回復できるのかなど、多様な観点からなされている。山岸(2010)は、レジリエンスを促進する要因として「適切な環境」を挙げ、安定した家庭環境や親子関係、家庭外でのサポートや安定した学校環境などが含まれると述べている。

### **レジリエンスと親子関係の研究**

欧米では1970年代からレジリエンス研究が展開され、環境要因や個人的要因など多面的な観点から検討が行われているが、日本ではいまだ活発に行われているとは言い難く、親子関係との関連を見たレジリエンス研究は数少ない。その中で山岸(2010)は、両親が青年に与える影響として「安定した支持的な家庭環境」の提供と両親の行動傾向の取り入れを挙げた。そして、両親との安定した良い関係として「親密性」と「尊敬」、行動傾向の意識的な取り入れである「モデル」と無意識的な取り入れである「同一視」の4つの観点から成る尺度を用いて、両親との関係と大学生におけるレジリエンスの程度との関連について検討した。その結果、男子学生ではレジリエンスと両親との関係や両親への態度との間の関連は弱く、特に父親に対する関係や態度との関連はほとんど見られなかった。一方、女子学生は父親への関係や態度との間に関連が見られ、特に父親に対して親密さを感じていたり、父親のようになりたいと思ったりする者は、新奇性追求、肯定的未来志向、メタ認知的志向、感情調整の得点が高いことが分かった。以上より、大学生のレジリエンスと両親への態度や認知は、男子学生ではほとんど関連が見られないのに対し、女子学生では多く関連が見られることが分かった。

親子関係に関する研究は、母子関係に焦点を当てたものが大半であった。しかし、近年母子だけでなく父親も含めた三者の関係を扱った研究が増えてきている。Davis, Dumenci, & Windle(1999)は、青年期になると、両親を父母として評価するだけでなく、両親の夫婦としてのあり方もより敏感に感じ取るようになると述べており、親子関係を考えるとき、父(母)と子の二者関係でなく、父母と子の三者関係についての視点が必要と考えられる。また、先の山岸(2010)では、親子関係とレジリエンスの関連について扱われているが、青年が夫婦関係をどのように認知しているかという点については検討されていない。そこで、本研究では、山岸(2010)では検討されなかった三者関係として青年が捉える両親の夫婦関係の認知を取り上げ、青年のレジリエンス傾向との関連について検討することを目的とする。

### **レジリエンスと自尊感情**

レジリエンスに関連すると考えられる心理的健康さを表す概念として自尊感情がある。自尊感情

とは、自己に対する総合的・全体的評価が捉える自己価値に関する感情のことである。Rosenberg(1965)は、自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情とし、原田(2008)は、これまでの自尊感情に関する研究を概観し、自尊感情の高い者は低い者と比べて抑うつが低く、学業成績が優れ、対人関係のあり方もよいことを述べ、自尊感情の高さは健康や適応の指標であるとしている。女子青年の自尊感情は、両親が良好な関係であるほど高いことも明らかにされている(伊藤, 2001)が、男子青年の自尊感情と両親の夫婦関係の関連について検討した研究は見当たらない。Masten & Coastworth (1998)により、レジリエンスの高い者の特徴として、自尊感情が高いことが報告されている。さらに、小塩・中谷・金子・長峰(2002)は、レジリエンスを持つ者の心理的特性を「精神的回復力」とし、「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」の3因子を抽出した。この精神的回復力は、自尊感情と正の相関があることが明らかにされている(小塩他, 2002; 田中・兒玉, 2010)。以上のことから、本研究ではこれまで検討されなかった青年が捉える両親の夫婦関係の認知と男子青年の自尊感情の関連性を検討する。さらに、青年が捉える両親の夫婦関係の認知が自尊感情を介してレジリエンスに関連するかどうかを検討する。以下、青年が捉える両親の夫婦関係の認知を「両親の夫婦関係の認知」、青年が捉える父親(母親)の夫婦関係について認知を「父親(母親)の夫婦関係認知」と表す。

### **親子関係と自尊感情の性差**

近年、日本においては母親と娘との強い関係が指摘され、母親と青年期以降の娘の情緒的なつながりの強さは「一卵性双生児」とも言われている(柏木・平石・大野, 2006)。小野寺(1984)は、青年期後半の娘から見た父親の魅力の高低を規定する第一要因について、「両親の夫婦関係が娘にとって理想的かどうか」という結果を示し、父親は娘にとって直接的存在ではなく、夫婦関係、ひいては妻という媒介をとおした間接的存在であると考察している。大島(2013)は、青年期後期の娘における両親から娘への関わりに対する見方には、妻から夫への信頼感が影響している可能性が示唆されたこと、このような結果が息子の場合には見られなかったことを明らかにしている。以上より、娘にとって母親が良好な夫婦関係を結んでいるかどうか親子関係、さらには心理的健康にとって重要であると考えられる。

他方、息子の場合は、娘の場合と異なり、母親ではなく父親が同一視の対象となる。柏木(1993)は父親と息子の関係性について概観し、父親の支配性と子どもの男らしさに関係があること、子どもの攻撃性の高さは、父親を家庭のボスとして認知していることと関係があることを述べている。しかし、思春期から青年期にかけては、父親は男子にとってモデルとしての意味を持つだけでなく、逆モデル、いわゆる反面教師としての役割を果たす可能性があるとも言われている(柏木, 1993)。また、松田(1993)は、息子が父親の行動を観察、模倣することに対して、母親がほめたり高く評価するなど、父子をつなぐ媒介項として母親の働きかけが重要な意味を持っていることも示唆しており、息子にとっては父親だけでなく、母親も直接的な存在であり、母親の夫婦関係評価が少なからず、息子の父親評価に影響している可能性もある。さらに、日本では伝統的性別分業が根強く残っていることや、父親の職場への長時間の拘束によって在宅時間の短さ、単身赴任などにより、母親が子育ての第一責任者となる家庭が多い。したがって、子どもは必然的に父親よりも母親とコミュ

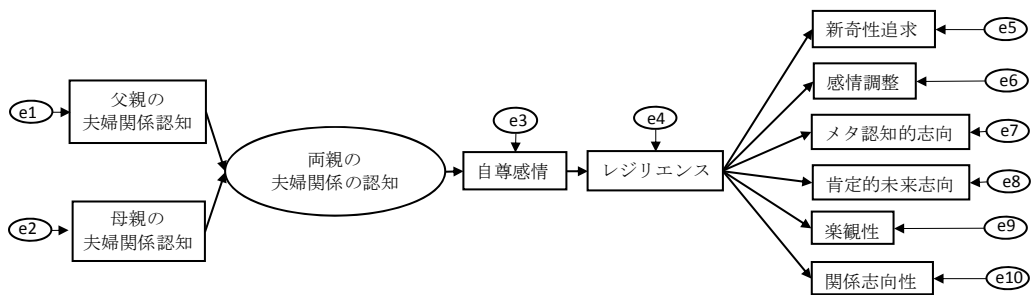


Figure 1. 本研究における仮説モデル

ニケーションをする機会が多くなり、母親が父子の媒介者となりやすい家庭環境にあると言える。以上より、日本における青年の自尊感情に与える両親の影響には次のような相違が見られると考えられる。まず、「母親の夫婦関係の認知」が「父親の夫婦関係の認知」よりも青年の自尊感情に強い影響力を持つと考えられる。また、その傾向は男子青年より女子青年の方が強いと思われる。本研究では、これらの仮説をもとに青年の自尊感情と両親の夫婦関係の認知、レジリエンスの関連について検討する。

### 本研究の目的

本研究では、「両親の夫婦関係の認知」は自尊感情を介して青年のレジリエンスに関連するかどうかを明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の仮説について検討する。

- 仮説 1 「『両親の夫婦関係の認知』が良好である青年は、良好でない青年よりも、自尊感情が高く、レジリエンスも高い」
- 仮説 2 「『両親の夫婦関係の認知』に及ぼす影響は、『父親の夫婦関係認知』よりも、『母親の夫婦関係認知』の方が強い」
- 仮説 3 「『父親の夫婦関係認知』と『母親の夫婦関係認知』が、『両親の夫婦関係の認知』に及ぼす影響は、男子よりも女子の方が強い」
- 仮説 4 「『両親の夫婦関係の認知』が自尊感情に及ぼす影響は、男子よりも女子の方が強い」
- また、これらの仮説をモデル化して Figure 1 に示した。

### 方法

**参加者** 今回の調査では両親の夫婦関係についてたずねるため、両親が健在であり、かつ婚姻関係が維持されている者のみを対象とした。質問紙への回答が得られた大学生 318 名のうち、回答に不備があった 9 名を分析から除外した。参加者は 309 名(男性 178 名, 女性 131 名)で、平均年齢は 20.56 歳( $SD=1.41$ )であった。欠損値のあったデータは、欠損した項目における参加者全体の平均値を代入して使用した。欠損値のあったデータの数は、1 項目のみが 8 名、2 項目が 2 名の計 10 名であった。

**質問紙の構成** ①両親の夫婦関係の認知：宇都宮(2005)の両親の結婚生活コミットメント認知尺度の4つの下位尺度のうち、夫婦関係の内容や質、配偶者の人格的次元に焦点が当てられている「存在の全的受容・非代替性」の10項目を使用した。この下位尺度は、諸井(1997)の夫婦関係評価尺度6項目(得点の高さは自らの両親の夫婦関係を良好であると認知していることを示す)と比較的強い相関が確認されている(宇都宮, 2005)。「あなたの父親(母親)が結婚生活を維持しているのはなぜだと思いますか」という1教示に対して5段階で評定を求めた。

②自尊感情尺度：山本・松井・山成(1982)の自尊感情尺度を使用した。10項目から構成され、各項目に対して、どの程度当てはまると思うかを5段階で評定を求めた。

③レジリエンス尺度：山岸(2010)のレジリエンス傾向の尺度を使用した。これは、山岸・寺岡・吉武(2010)が「精神的回復力尺度」(小塩他, 2002)を参考に作成した尺度から、山岸(2010)が6つの下位尺度(肯定的未来志向, 楽観性, 感情調整, メタ認知的志向, 新奇性追求, 関係志向性)を構成したものである。24項目から構成され、5段階で評定を求めた。

④フェイス項目：年齢, 性別

**調査手続き** 2013年12月に、A大学において、講義時間の一部を利用して質問紙を回答させ、その時間に回収した。

## 結果

### 各尺度得点の記述統計量及び性差

参加者における各尺度の平均値, 標準偏差それぞれの尺度の得点の平均値を男女で比較するために、*t*検定を行ったところ、有意差は見られなかった(Table 1)。また、レジリエンスの下位尺度における得点の平均値を男女別に比較したところ、楽観性( $t(307)=2.52, p<.05$ )は男子の方が女子よりも有意に高く、関係志向性( $t(307)=5.12, p<.001$ )は女子の方が男子よりも有意に高かった(Table 2)。

Table 1  
各尺度における男女別の得点

	男子( $n=178$ )		女子( $n=131$ )		<i>t</i> 値
	平均値	<i>SD</i>	平均値	<i>SD</i>	
父親の夫婦関係認知	3.58	0.92	3.56	0.84	.18
母親の夫婦関係認知	3.53	1.00	3.53	0.91	.26
自尊感情	3.12	0.70	3.04	0.66	1.03
レジリエンス	3.56	0.49	3.59	0.41	.64

Table 2

レジリエンスの下位尺度における男女別の平均値と標準偏差

	男子( <i>n</i> =178)		女子( <i>n</i> =131)		<i>t</i> 値
	平均値	<i>SD</i>	平均値	<i>SD</i>	
新奇性追求	3.52	0.60	3.50	0.53	.31
感情調整	3.42	0.82	3.31	0.73	1.24
メタ認知的志向	3.85	0.62	3.91	0.52	.87
肯定的未来志向	3.47	0.84	3.54	0.79	.78
楽観性	3.24	0.74	3.01	0.83	2.52*
関係志向性	3.50	0.82	3.98	0.80	5.12***

\**p*<.05, \*\*\**p*<.001

さらに、参加者の「父親の夫婦関係認知」と「母親の夫婦関係認知」の得点の平均値を比較するために *t* 検定を行ったところ、有意差は見られなかった( $t(308)=1.41$ ,  $p=.16$ )。次に男女別でも「父親の夫婦関係認知」と「母親の夫婦関係認知」の得点の平均値を比較したが、男子・女子ともに有意差は見られなかった( $t(177)=1.30$ ,  $p=.20$ ;  $t(130)=0.66$ ,  $p=.51$ )。

#### 各尺度の信頼性

参加者について、両親の夫婦関係の認知尺度の信頼性分析を行った。その結果、「父親の夫婦関係認知」の Cronbach の信頼性係数は  $\alpha=.94$ 、「母親の夫婦関係認知」の Cronbach の信頼性係数は  $\alpha=.96$  であった。また、自尊感情尺度について信頼性分析を行ったところ、Cronbach の信頼性係数は  $\alpha=.83$  であった。次にレジリエンス尺度について尺度全体の信頼性分析を行ったところ、Cronbach の信頼性係数は  $\alpha=.84$  であった。すべての尺度において十分な信頼性係数が得られたため、すべての尺度を以後の分析に用いることとした。また、分析では各尺度に含まれる項目の評定値の合計を算出して使用した。

#### 各尺度の関連性

参加者における「父親の夫婦関係認知」・「母親の夫婦関係認知」と自尊感情、及びレジリエンスの影響関係を検討するために相関係数を算出した(Table 3)。また、男女別の各尺度間の相関係数を算出した(Table 4, 5)。

Table 3  
各尺度間の相関係数(全体)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1.父親の夫婦関係認知										
2.母親の夫婦関係認知	.85***									
3.自尊感情	.17**	.12*								
4.レジリエンス	.17**	.14*	.50***							
5.新奇性追求	.08	.08	.31***	.67***						
6.感情調整	.05	.05	.30***	.66***	.30***					
7.メタ認知的志向	.02	.00	.13*	.57***	.35***	.38***				
8.肯定的未来志向	.18**	.12*	.49***	.74***	.42***	.29***	.23***			
9.楽観性	.11	.06	.50***	.63***	.36***	.49***	.10	.42***		
10.関係志向性	.15**	.15**	.03	.39***	.04	-.04	.18**	.28***	-.13*	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 4  
各尺度間の相関係数(男子)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1.父親の夫婦関係認知										
2.母親の夫婦関係認知	.86***									
3.自尊感情	.18*	.14								
4.レジリエンス	.17*	.13	.51***							
5.新奇性追求	.15*	.15*	.37***	.79***						
6.感情調整	.07	.09	.34***	.70***	.64***					
7.メタ認知的志向	.07	.02	.25**	.63***	.36***	.43***				
8.肯定的未来志向	.12	.07	.51***	.77***	.44***	.37***	.33***			
9.楽観性	.21**	.13	.48***	.68***	.57***	.55***	.26***	.48***		
10.関係志向性	.16	.20**	.05	.39***	.47***	.02**	.10	.25**	-.03	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 5  
各尺度間の相関係数(女子)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1.父親の夫婦関係認知										
2.母親の夫婦関係認知	.84***									
3.自尊感情	.16	.08								
4.レジリエンス	.16	.14	.45***							
5.新奇性追求	.08	.08	.23**	.77***						
6.感情調整	-.03	-.02	.20*	.60***	.59***					
7.メタ認知的志向	-.04	-.02	-.07	.44***	.26**	.32***				
8.肯定的未来志向	.28**	.20*	.48***	.70***	.37***	.17	.07			
9.楽観性	-.03	-.01	.52***	.59***	.57***	.41***	-.12	.36***		
10.関係志向性	.15	.09	.04	.40***	.28**	-.10	.30**	.31***	-.18*	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

その結果、男子では、「父親の夫婦関係認知」は、「母親の夫婦関係認知」や自尊感情、レジリエンスと関連があり、レジリエンスの下位尺度である新奇性追求や楽観性にも関連が見られた。一方、「母親の夫婦関係認知」は、レジリエンスの2つの下位尺度(新奇性追求、関係志向性)にのみ関連が見られた。自尊感情は、レジリエンスや5つのレジリエンスの下位尺度(新奇性追求、感情調整、メタ認知的志向、肯定的未来志向、楽観性)と関連が見られた。

これに対して女子では、「父親の夫婦関係認知」は「母親の夫婦関係認知」やレジリエンスの下位尺度である肯定的未来志向と関連が見られた。「母親の夫婦関係の認知」は、レジリエンスの下位尺度である肯定的未来志向のみと関連が見られた。自尊感情は、レジリエンスやレジリエンスの4つの下位尺度(新奇性追求、感情調整、肯定的未来志向、楽観性)と関連が見られた。

### レジリエンス尺度の因子構造の検討

レジリエンス尺度において確証的因子分析を行ったが、このモデルは適合度が低かった( $\chi^2(237) = 595.475$ ,  $p < .00$ , CFI=.867, GFI=.863, AGFI=.826, RMSEA=.070, AIC=721.475)。そこで、修正指数とパス係数の推定値をもとにモデルを修正したが、適合度は低いままであった( $\chi^2(246) = 491.950$ ,  $p = .00$ , CFI=.909, GFI=.886, AGFI=.861, RMSEA=.057, AIC=599.950)。しかし、レジリエンス尺度のCronbachの信頼性係数は $\alpha = .84$ と十分な信頼性が得られているため、仮説の検証においてはレジリエンスの下位尺度は用いず、レジリエンス尺度全体の合計点により分析を行うこととした。

### 両親の夫婦関係の認知尺度の因子構造の検討

「父親の夫婦関係認知」・「母親の夫婦関係認知」について、確証的因子分析を行ったが、このモデルは両者とも適合度は低かった( $\chi^2(35) = 173.490$ ,  $p < .001$ , CFI=.942, GFI=.902, AGFI=.845, RMSEA=.113, AIC=213.490;  $\chi^2(35) = 158.595$ ,  $p < .001$ , CFI=.957, GFI=.916, AGFI=.868, RMSEA=.107, AIC=198.595)。そこで、モデルの修正を試みたが、誤差変数間に共通の影響を仮定できなかったため、「父親の夫婦関係認知」・「母親の夫婦関係認知」を1つの因子として用いることができなかった。



「父親の夫婦関係認知」・「母親の夫婦関係認知」について因子分析(主因子法)を行ったところ、両者とも1因子が抽出された。そこで、それぞれの合計得点を使用することで、「両親の夫婦関係の認知」を2項目から構成された因子として扱うこととした。この場合、構成概念の分散を固定することで制約を課すことが必要となったため、「父親の夫婦関係認知」の誤差分散を $(1-\rho)S_x^2$ とした。

「父親の夫婦関係認知」の信頼性係数(.944)と分散(8.362)を代入したところ、 $(1-\rho)S_x^2=4.388272$ となり、これを「父親の夫婦関係認知」の誤差分散として代用した。

### 仮説1の検証

各変数の影響関係を検討するためにパス解析を行った(Figure 2)。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(6)=4.958$ ,  $p=.55$ , CFI=1.000, GFI=.996, AGFI=.980, RMSEA=.000, AIC=52.958であった。自尊感情が媒介しない場合、「両親の夫婦関係の認知」とレジリエンスは関連があり( $\beta=.17$ ,  $p<.01$ )、レジリエンスの決定係数は.03であった。これに対し、自尊感情を媒介させたモデルでは、「両親の夫婦関係の認知」とレジリエンスの関連はなくなった( $\beta=.09$ ,  $n.s$ )。また、「両親の夫婦関係の認知」と自尊感情、自尊感情とレジリエンスに関連が見られた( $\beta=.17$ ,  $p<.01$ ;  $\beta=.47$ ,  $p<.001$ )。自尊感情の決定係数は.03、レジリエンスの決定係数は.24であった。

### 仮説2の検証

「両親の夫婦関係の認知」から「父親の夫婦関係認知」へのパス係数(.97)と「両親の夫婦関係の認知」から「母親の夫婦関係認知」へのパス係数(.88)の差を調べるために、パラメータ間の差に対する検定統計量を一对比較をした。その結果、両者の間の検定統計量が-0.692となり、有意差は認められなかった。

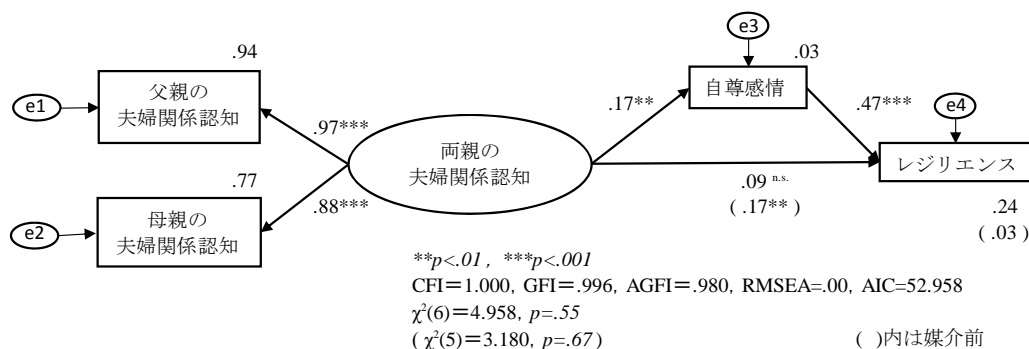


Figure 2. 「両親の夫婦関係の認知」と自尊感情、レジリエンスに関するパス解析の結果(全体)

### 仮説3・仮説4の検証

まず、仮説3について、「両親の夫婦関係の認知」から「父親の夫婦関係認知」へのパス係数の性別が捉える差を見るために、多母集団同時分析を用いて一対比較を行った(Figure 3, 4)。その結果、男子のパス係数(.97)と女子のパス係数(.97)の間の検定統計量が-1.042となり、有意差は認められなかった。次に、「両親の夫婦関係の認知」から「母親の夫婦関係認知」へのパス係数の男女間における差を見るために、多母集団同時分析を用いて一対比較を行った。その結果、男子のパス係数(.88)と女子のパス係数(.86)の間の検定統計量が-1.115となり、有意差は認められなかった。

また、仮説4について、「両親の夫婦関係の認知」から自尊感情へのパス係数の差を見るために、多母集団同時分析を用いて男女間のパス係数の一対比較を行った。その結果、男子のパス係数(.18)と女子のパス係数(.15)の間の検定統計量が-0.332となり、有意差は認められなかった。

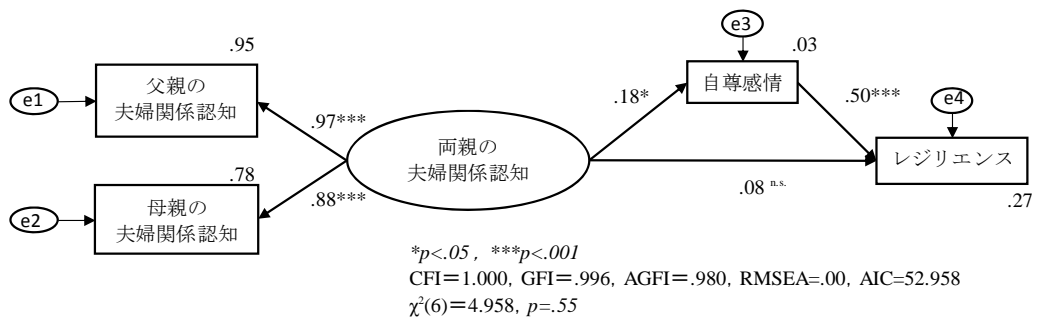


Figure 3. 「両親の夫婦関係の認知」と自尊感情、レジリエンスに関するパス解析の結果(男子)

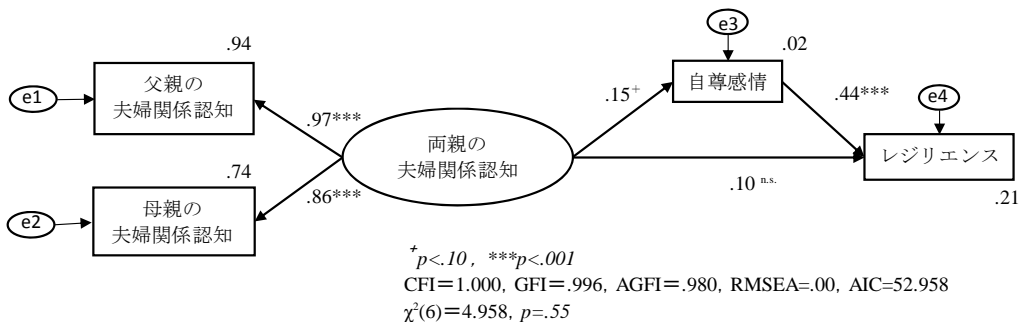


Figure 4. 「両親の夫婦関係の認知」と自尊感情、レジリエンスに関するパス解析の結果(女子)

さらに、全体群・男子群・女子群の3群に対して、「両親の夫婦関係の認知」から「父親の夫婦関係の認知」・「母親の夫婦関係の認知」と自尊感情への3つのパス係数が等しいと仮定し、等値制約を課したモデルとの比較を行った(Figure 5, 6, 7)。その結果、適合度指標は  $\chi^2(9)=6.333, p=.71$ , CFI=1.000, GFI=.996, AGFI=.980, RMSEA=.000, AIC=48.333 となり、こちらのモデルの方が適合度が良好であった。

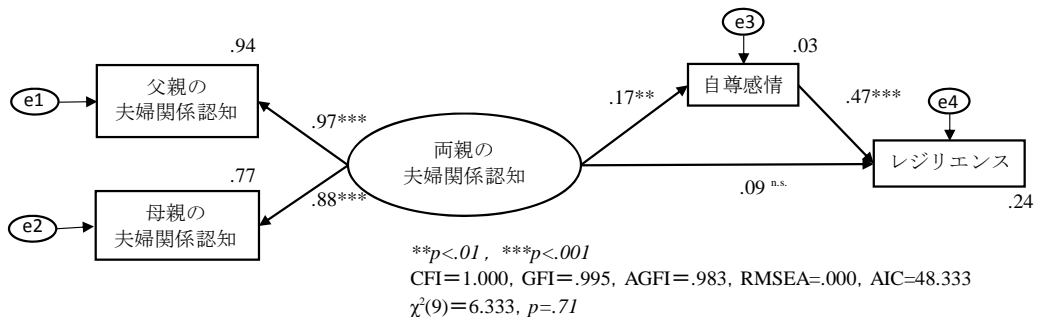


Figure 5. 等値制約を課した比較モデル(全体)

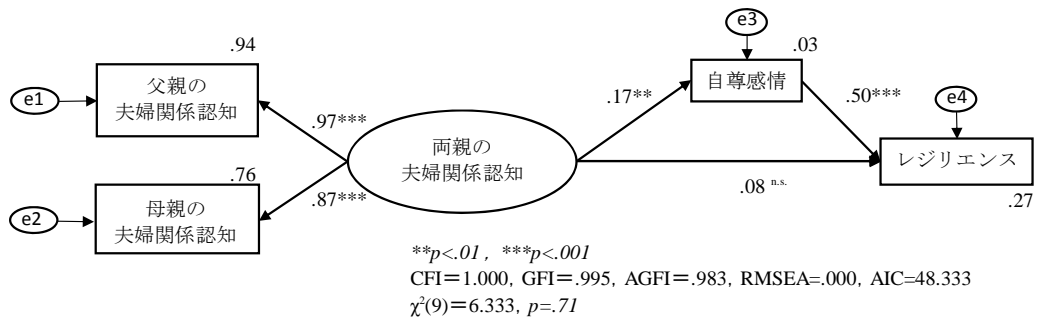


Figure 6. 等値制約を課した比較モデル(男子)

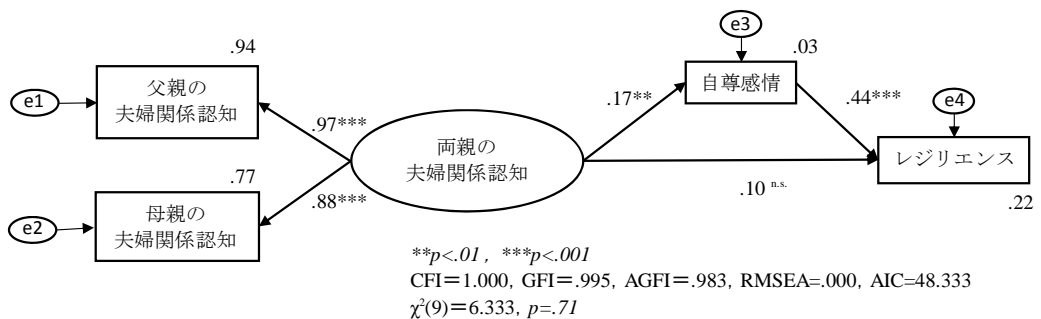


Figure 7. 等値制約を課した比較モデル(女子)

## 考察

### 本研究の仮説モデルについて

本研究では、青年が捉える両親の夫婦関係の認知の良好さが、青年の自尊感情とレジリエンスに影響を及ぼすかどうかを検討することが目的であった。調査結果から、青年が捉える両親の夫婦関係の認知の良好さは、自尊感情を介してレジリエンスを高めることが明らかになった。よって、仮説1『両親の夫婦関係の認知』が良好である青年は、良好でない青年よりも、自尊感情が高く、レジリエンスも高い』は支持されたとと言える。レジリエンス尺度と自尊感情については先行研究(小塩他, 2002 ; 田中・児玉, 2010)においても正の相関が確認されており、この結果は先行研究を支持するものとなっている。

第2に、青年が捉える父母それぞれの夫婦関係についての認知の間には差がないことが分かった。よって、仮説2『両親の夫婦関係の認知』に及ぼす影響は、『父親の夫婦関係認知』よりも、『母親の夫婦関係認知』の方が強い』は支持されなかった。父母それぞれの夫婦関係についての認知の相関が高かったことから、青年にとっての両者の認知は同質であった可能性が存在する。また、データの収集後に何人かの参加者から両親の夫婦関係について「見当もつかない」という意見を受けたことから、青年は自分の両親の夫婦関係について関心が低かった可能性が考えられる。そのため、父母がそれぞれに対してどのような夫婦関係と捉えているかを想像するのが難しく、違いが生じなかったのではないかと推測される。

第3に、青年が捉える父母それぞれの夫婦関係についての認知が、青年が捉える両親の夫婦関係の認知に与える影響に有意な差は見られなかった。また、青年が捉える両親の夫婦関係の認知が自尊感情に与える影響には有意な差は見られなかった。さらに、それぞれのパスに等値制約を置いた比較モデルの方が適合度が良いことが示された。よって、仮説3『父親の夫婦関係認知』と『母親の夫婦関係認知』が、『両親の夫婦関係の認知』に及ぼす影響は、男子よりも女子の方が強い』、及び仮説4『両親の夫婦関係の認知』が自尊感情に及ぼす影響は、男子よりも女子の方が強い』は支持されなかった。女子青年に関しては、両親の夫婦関係や結婚生活の認知が重要であると強調してきた先行研究は散見されるが(例えば、小野寺, 1984 ; 伊藤, 2001)、これらは女子青年のみを対象とした研究であり、男子青年も含めた研究はこれまでなされていなかった。本研究の結果から、青年による父母それぞれの夫婦関係についての認知や両親の夫婦関係の認知が自尊感情に及ぼす影響は、性別に左右されることのない要因であることが考えられる。

以上より、両親の夫婦関係を良好と捉えている青年では、自尊感情を介してレジリエンスを高めるが、青年が捉える父親と母親それぞれの夫婦関係についての認知が両親の夫婦関係の認知に及ぼす影響は同程度であることが示唆された。そして、父親と母親それぞれの夫婦関係についての認知が両親の夫婦関係に及ぼす影響、さらに、その両親の夫婦関係についての認知が自尊感情に及ぼす影響には男女差がないことが示唆された。

### 本研究の限界と今後の展望

まず、本研究では両親の夫婦関係についてたずねるため、両親が健在であり、かつ婚姻関係が維

持されている者のみを対象とした。そのため、比較的家庭環境が良好な青年が多かったと考えられる。また、実家暮らしの青年と親元を離れて一人暮らしをする青年では、両親の夫婦関係の認知の仕方が違う可能性もある。今後は青年の居住形態なども加味し、サンプリングの方法を考慮する必要がある。

次に、男子青年の父親の夫婦関係に対する認知が良好であるほど男子の自尊感情も高い傾向が見られたが、女子では関連が見られなかった。さらに、男子・女子ともに母親の夫婦関係に対する認知は、自尊感情と関連が見られなかった。この結果は、女子青年の自尊感情は、両親が良好な関係であるほど高いとする伊藤(2001)の知見と相対するものである。本研究では、両親の夫婦関係の認知について、参加者に父母別に回答させた点で先行研究と異なっている。このことが先行研究との不一致の理由として考えられるが、この点についてもさらに検討が必要である。

最後に、今回は参加者を青年期の大学生に設定したが、両親の夫婦関係の認知が子どもの自尊感情、ひいてはレジリエンスに与える影響は、子どもの発達段階によって変化することも考えられる。今後は参加者を児童期、思春期まで広げて研究を進めていくことも必要である。

## 引用文献

- Davis, P. T., Dumenci, L., & Windle, M. (1999). The interplay between maternal depressive symptoms and marital distress in the prediction of adolescent adjustment. *Journal of Marriage and the Family*, **61**, 238-254.
- 原田宗忠 (2008). 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係 教育心理学研究, **56**, 330-340.
- 石毛みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連 —受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, **53**, 356-367.
- 伊藤裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達 —自尊感情, 身体満足度との関連から— 教育心理学研究, **49**, 458-468.
- 柏木恵子 (1993). 父親の発達心理学—父性の現在とその周辺 川島書店
- 柏木恵子・平山順子・大野祥子(2006). 家族心理学への招待：今、日本の家族は?家族の未来は? ミネルヴァ書房
- Masten & Coastworth (1998). The Development of Competence in Favorable and Unfavorable Environments : Lessons From Research on Successful Children. *American Psychologist*, 205-220.
- 松田 惺 (1993). 父子関係 柏木恵子(編著) 父親の発達心理学：父性の現在とその周辺 川島書店 pp.227-266.
- 諸井克英 (1997). 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の衡平性—女子青年の場合— 家族心理学研究, **11**, 69-81.
- 小野寺敦子 (1984). 娘から見た父親の魅力 心理学研究, **55**, 289-295.
- 大島聖美 (2009). 妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響 発達心理

- 学研究, **20**, 351-361.
- 大島聖美 (2013). 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差 発達心理学研究, **24**, 55-65.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 —精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, **35**, 57-65.
- Rosenberg, M (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey ; Princeton University Press.
- 田中千晶・兒玉憲一 (2010). レジリエンスと自尊感情, 抑うつ症状, コーピング方略との関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **9**, 67-79.
- 宇都宮 博 (2005). 女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知 —子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント— 教育心理学研究, **53**, 209-219.
- 山岸明子 (2010). 大学生のレジリエンスと両親への態度・認知との関連—性差に着目して— 順天堂スポーツ健康科学研究, **57**, 87-94.
- 山岸明子・寺岡三左子・吉武幸恵 (2010). 看護援助実習の受けとめ方と resilience(精神的回復力)及び自尊心との関連 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, **6**, 1-10.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-65.